

令和元年度全国学力・学習状況調査結果について
～滝川市立小学校、中学校の学力の状況等～

滝川市教育委員会
(担当：教育総務課)

1 調査の概要

(1) 実施期日 平成31年4月18日(木)

(2) 調査の対象学年

・小学校第6学年、中学校第3学年の全児童生徒を対象

(3) 調査の内容

①教科に関する調査(国語、算数・数学、英語)

小学校(国語：14問、算数：14問、)

中学校(国語：10問、数学：16問、

英語：「聞くこと、読むこと、書くこと」21問、「話すこと」5問)

※今年度の問題から、従来の「主として『知識』に関する問題」と「主として『活用』に関する問題」の区分がなくなり、一体的に問う問題形式となった。

※英語の「話すこと」の結果提供は、各学校・生徒の集計結果のみのため、本市の生徒の平均正答率は、提供されていない。

②生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

(4) 参加状況(悉皆調査)

小学校6校 中学校4校

(5) 参加児童生徒数(下表)

		学校	対象児童数	受験者数	未受験数			学校	対象生徒数	受験者数	未受験数
小学校第6学年		滝川第一小	36	35	1	中学校第3学年		江陵中	106	97	9
		滝川第二小	62	61	1			明苑中	123	117	6
		滝川第三小	62	59	3			開西中	47	46	1
		西小	46	45	1			江部乙中	15	15	0
		江部乙小	14	14	0						
		東小	83	83	0						
		計	303	297	6			計	291	275	16
		参加率	98.0%					参加率	94.5%		

2 教科に関する調査の結果

全国・全道の平均正答率に対し、本市の児童生徒の平均正答率を
上回っている(5%以上)、やや上回っている(3%以上5%未満)、
同程度(上位)(1%以上3%未満)、同程度(±1%未満)、同程度(下位)(-3%より上-1%以下)
やや下回っている(-5%より上-3%以下)、下回っている(-5%以下) で示した。

(1) 小学校

①【国語】

滝川市における平均正答率は、全国の平均正答率(63.8%)と同程度(上位)、全道の平均正答率(63.0%)をやや上回る正答率である。

②【算数】

滝川市における平均正答率は、全国の平均正答率(66.6%)と同程度、全道の平均正答率(64.0%)と同程度(上位)の正答率である。

(2) 中学校

①【国語】

滝川市における平均正答率は、全国の平均正答率(72.8%)、全道の平均正答率(72.0%)をとともにやや下回る正答率である。

②【数学】

滝川市における平均正答率は、全国の平均正答率(59.8%)、全道の平均正答率(58.0%)をとともに下回る正答率である。

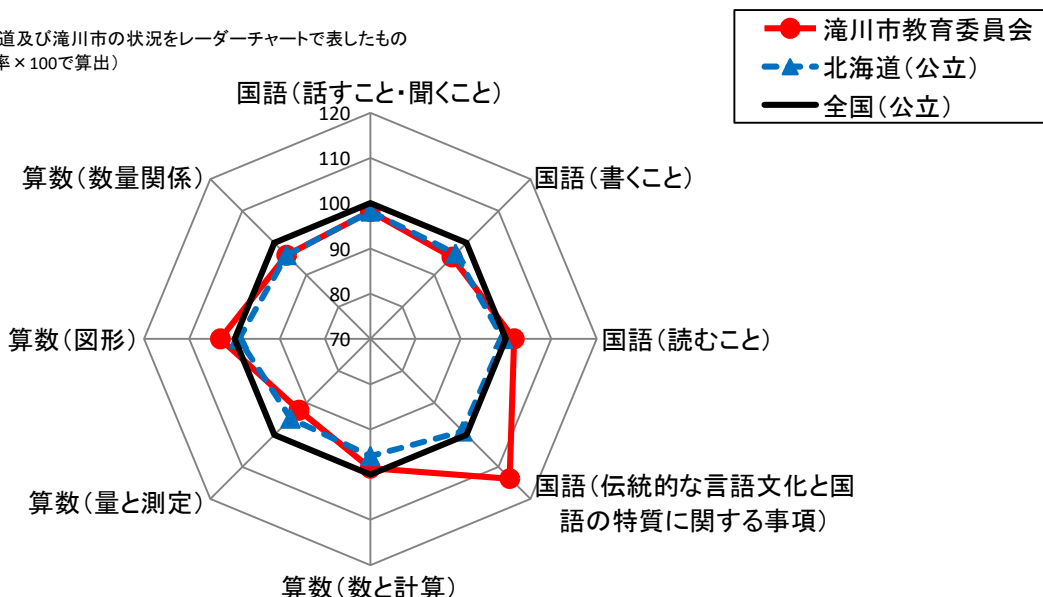
③【英語】

滝川市における平均正答率は、全国の平均正答率(56.0%)をやや下回り、全道の平均正答率(54.0%)と同程度(下位)の正答率である。

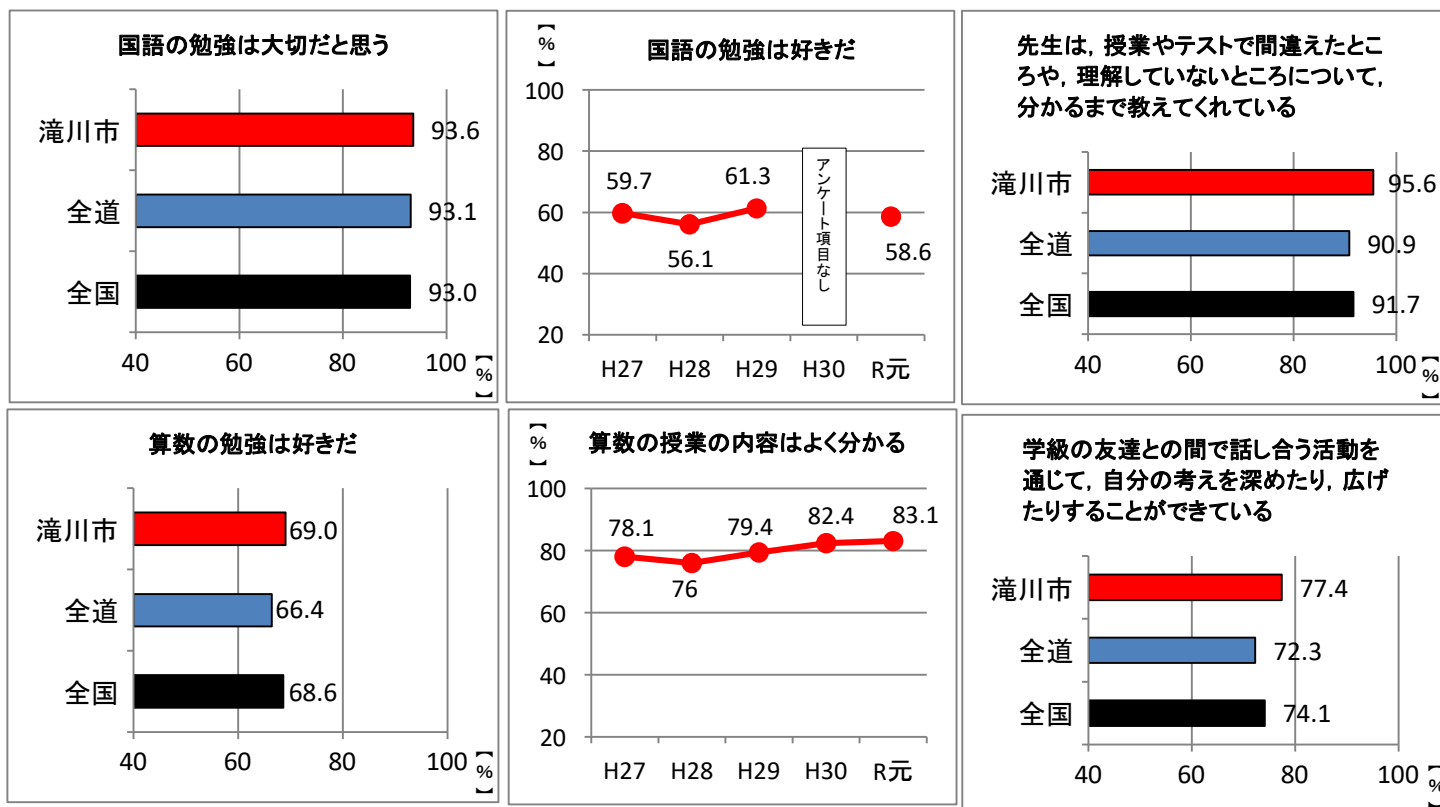
3 滝川市立小学校の学力の状況及び学力向上策（学校数：6校、児童数：297名）

【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び滝川市の状況をレーダーチャートで表したもの
 （滝川市の平均正答率÷全国平均正答率×100で算出）



【児童質問紙調査】



【分析】

教科	国語の平均正答率は全国・全道の平均正答率を上回った。また、算数の平均正答率は、全道の平均正答率を上回り、全国平均正答率と同程度となった。領域別に見ると、国語の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」は全国・全道の平均正答率を大きく上回り、「読むこと」も上回っていた。また、算数の「図形」は、全国・全道の平均正答率を大きく上回っていた。しかし、国語の「書くこと」や算数の「量と測定」及び「数量関係」は全国・全道平均正答率を下回っており、苦手としている傾向が見られた。	学校は、児童の姿や地域の現状等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立させた。また、児童の学習状況や課題を全教職員で共有し、組織的に授業改善に取り組んできた他、個に応じた指導にも力を入れてきた。今後は、課題となっている領域の力を高めるために、授業では引き続き「話し合う活動」を通じて、深い学びへと導いたり、放課後等には学習サポートを充実させたりする等の手立てを講じる必要がある。
児童質問紙	算数の勉強が好きだと回答した割合は、全国・全道の割合より高く、また、算数の授業がよく分かると回答した割合は、昨年よりも0.7%の伸びが見られた。今回の算数の平均正答率の伸びの要因として、「分かった。」「できた。」という充足感・達成感、そして、そこから生まれる興味・関心の高揚が挙げられる。国語においては、勉強は大切だと回答した割合が全国・全道の割合より高くなっており、今後、算数同様、興味・関心を高めることにより、国語の学力のさらなる向上が期待できる。	
学校質問紙	「前年度までに、学習規律の維持を徹底した」「前年度までに、計算問題などの反復練習をする授業を行った」「前年度までに家庭学習の取組として、学校では児童に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにした」と回答した学校が多い。	

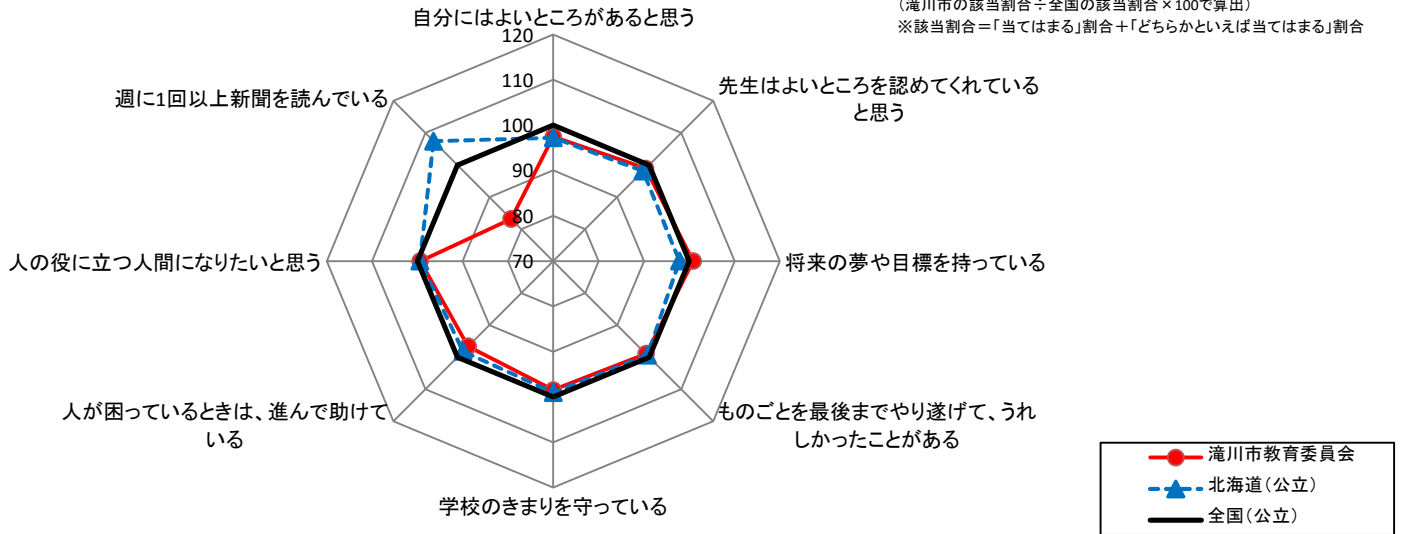
【滝川市の学力向上策】

- 個に応じた学びの支援のため、退職教員等外部人材活用事業や「学びサポーター」の活用など少人数指導体制を積極的に推進している。
- ティーム・ティーチング指導や習熟度別指導を取り入れ、一人一人の児童が抱える学習のつまずきの解消や発展的な学習の充実に取り組んでいる。
- 小学校3・4年生に対して「少人数学級実践事業」を導入し、児童一人一人へのきめ細やかな指導・支援を行い、理解度や興味・関心の向上を図っている。
- 放課後や長期休業中の学習機会を拡充し、補充的・発展的な学習に取り組ませるとともに、児童の家庭学習への意欲化・定着化を図っている。
- 授業改善推進チーム活用事業を活用した学校間の取組を市内のすべての小学校に発信し、積極的な授業改善を推進している。
- ◎主体的・対話的で深い学びに関する教職員研修会を実施する。

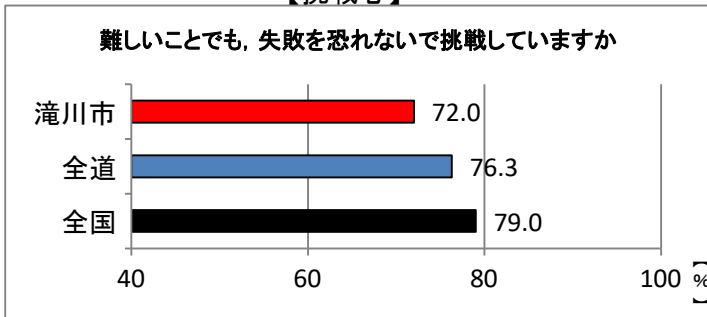
4 滝川市立小学校の学習状況及び改善策（学校数：6校、児童数：297名）

【自尊心及び規範意識等全体の状況】

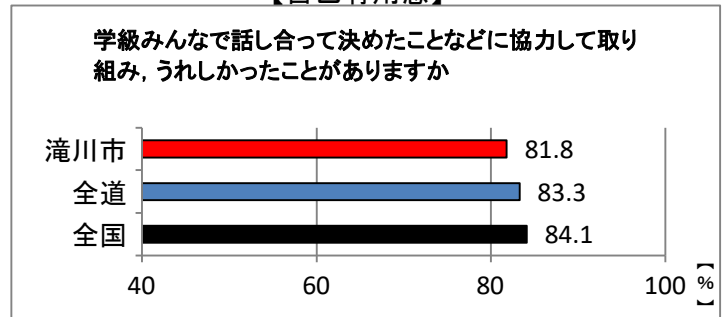
各児童質問紙項目別に全国を100とした場合の全道及び滝川市の状況をレーダーチャートで表したもの
 （滝川市の該当割合÷全国の該当割合×100で算出）
 ※該当割合＝「当てはまる」割合＋「どちらかといえば当てはまる」割合



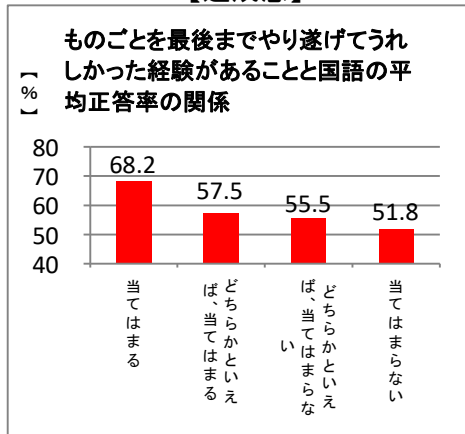
【挑戦心】



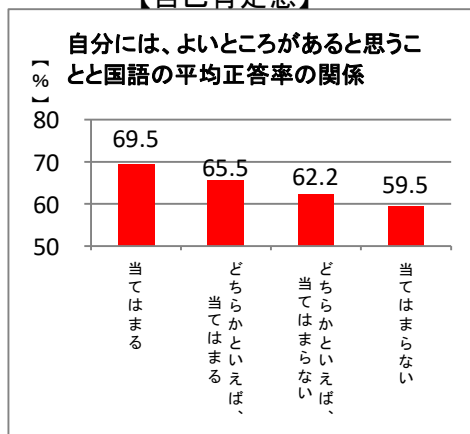
【自己有用感】



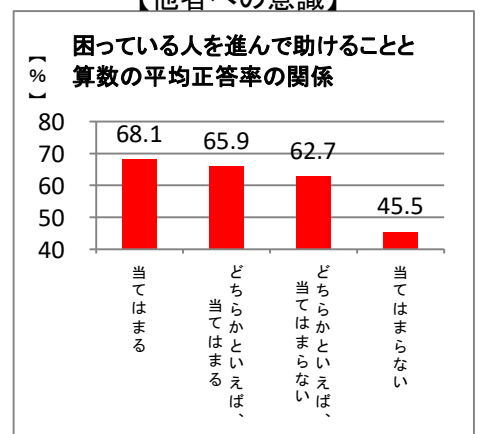
【達成感】



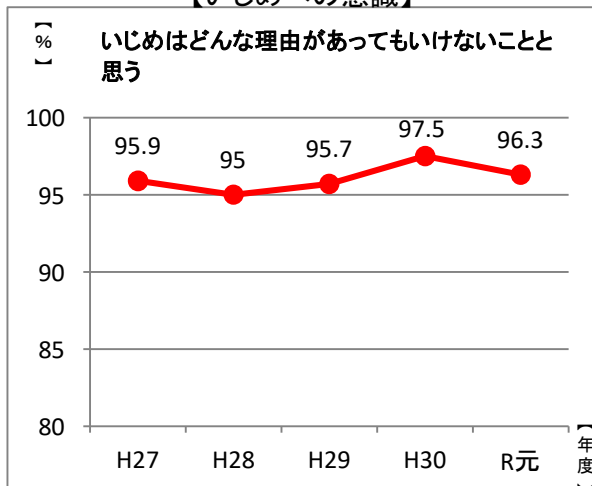
【自己肯定感】



【他者への意識】



【いじめへの意識】



【分析】

○「将来の夢や目標を持っている」と回答した割合は、全国・全道平均を上回っており、特別活動を要としたキャリア教育の充実が図られたためと考える。
 ○「人が困っているときは、進んで助けている」と回答した割合は、全国・全道の割合を下回った。困っている人を進んで助けることと算数の平均正答率には、相関関係が見られるため、教育活動全体において他者への意識を高める必要がある。
 ○「週1回以上新聞を読んでいる」と回答した児童の割合は、全国・全道の割合をともに大きく下回っている。社会に目を向けさせたり、多様な見方考え方に基づき、読解力・思考力・判断力・表現力等を身に付けさせたりするためにも、新聞等を活用した授業等を行うことが求められる。
 ○「自分にはよいところがあると思う」と回答した割合は、昨年同様、全国の割合を下回った。よいところがあると思うことと国語の平均正答率には、相関関係が見られるため、子どもに寄り添った支援を行う中で、自己肯定感を高めさせる必要がある。

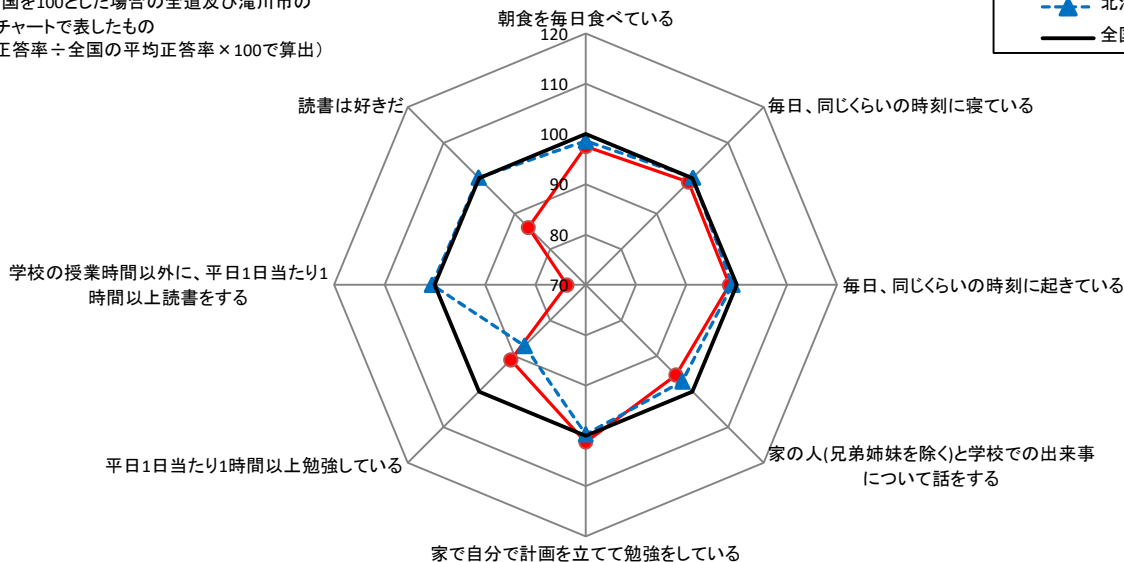
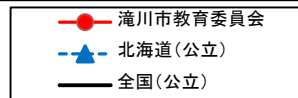
【滝川市の改善策】

○「いじめはどんな理由があってもいけないことと思う」と回答した割合は、1.2%減少したものの、これまで同様、高い割合を維持している。滝川市は、100%となるよう目標を掲げて施策を推進しており、今後も児童・家庭への一層の啓発と小中9年間を通じた子どもの心の成長を意識した主体的な活動が行われるよう支援する。
 ○失敗を恐れずに挑戦することやものごとを最後までやり遂げてうれしかった経験をしたことがある割合については、いずれも全国・全道の割合を下回った。今後は、学校生活において、友だちと協働し、難しいことにチャレンジしたり、ものごとをやり遂げたりする場を設け、成功体験を積み重ねていく中で挑戦心や達成感、自己有用感を高めていく。

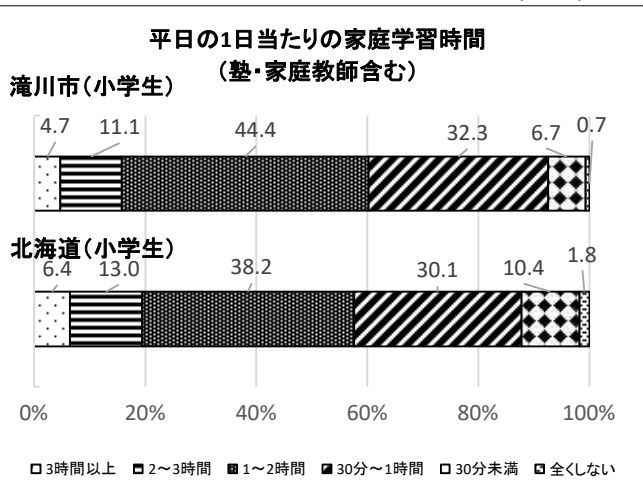
5 滝川市立小学校の学習状況及び改善策(学校数:6校、児童数:297名)

【家庭生活・学習習慣全体の状況】

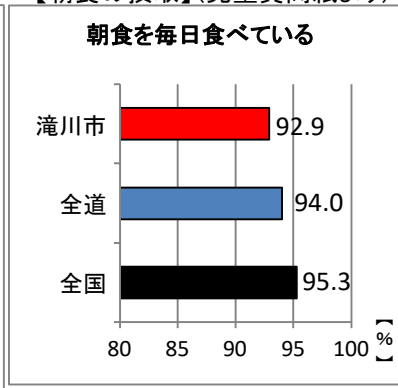
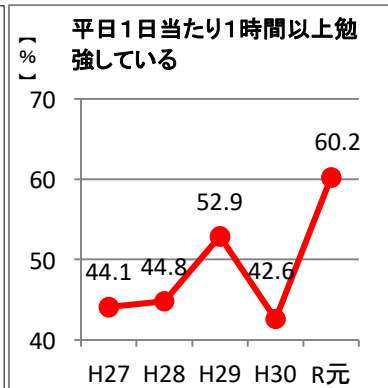
質問事項別に全国を100とした場合の全道及び滝川市の状況をレーダーチャートで表したもの
(滝川市の平均正答率÷全国平均正答率×100で算出)



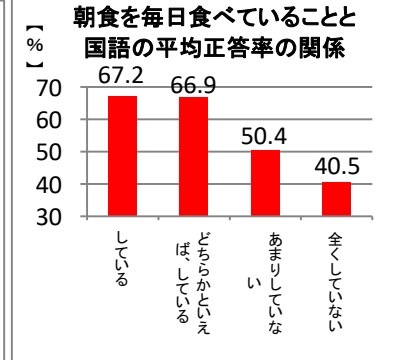
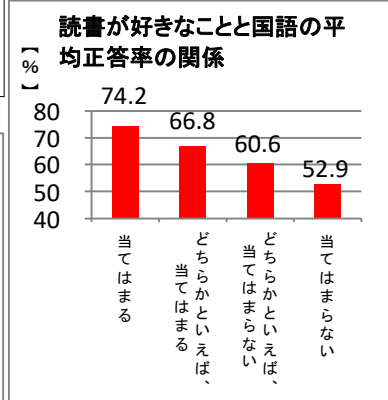
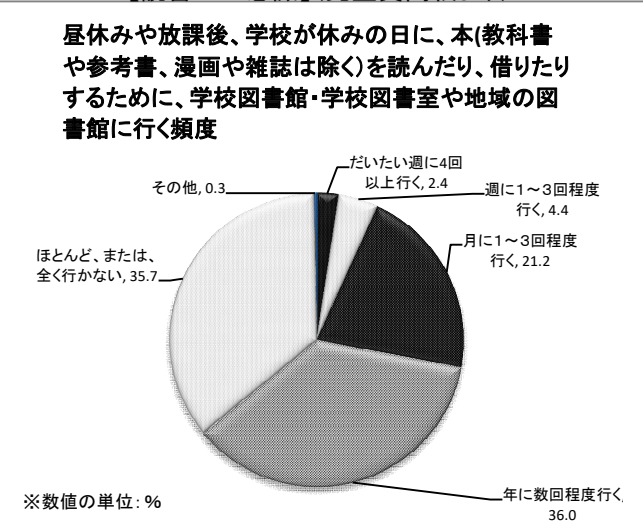
【家庭学習時間(平日)】(児童質問紙より)



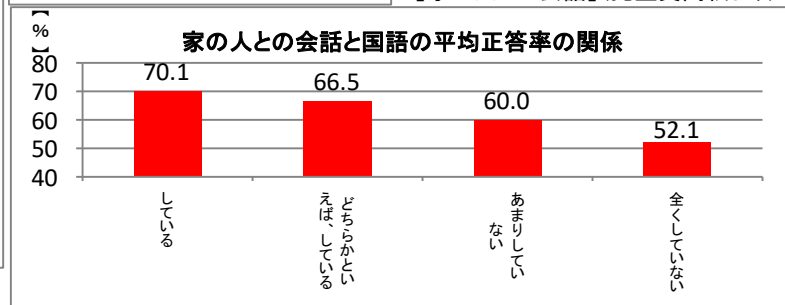
【朝食の摂取】(児童質問紙より)



【読書への意識】(児童質問紙より)



【家の人との会話】(児童質問紙より)



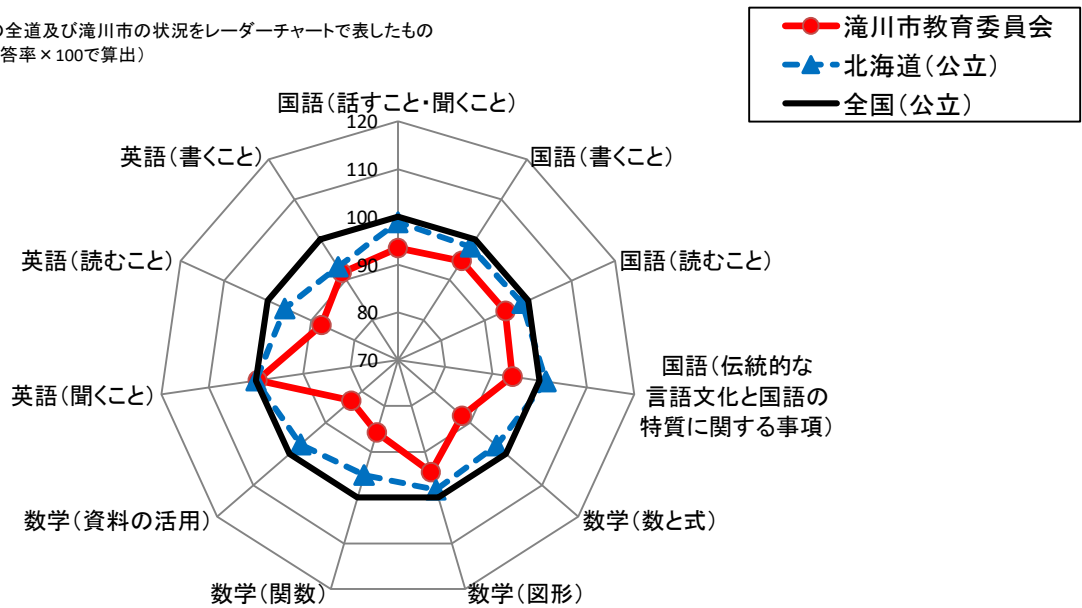
【分析及び改善策】

○平日1日当たり1時間以上勉強していると回答した児童の割合は、依然として全国の割合を下回っているものの、今回、全道の割合は上回った。また、学習時間にも伸びが見られている。これまで、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図ったり、家庭学習の取組として、学校では生徒に家庭での学習方法を具体例を挙げながら教えるようにしたりした成果だと考える。
○昼休みや放課後、学校が休みの日に、本(教科書や参考書、漫画や雑誌は除く)を読んだり、借りたりするために、学校図書室や地域の図書館に行く頻度について、週に1回以上行くことと回答した児童の割合は、6.8%となった。この割合は、全国と比べると10%以上下回っており、全道と比べても8%程下回った。さらに、読書が好きだと回答した児童も、全国・全道の割合を下回った。読書が好きだと回答した児童も、全国・全道の割合を下回った。読書が好きだと回答した児童も、全国・全道の割合を下回った。読書が好きだと回答した児童も、全国・全道の割合を下回った。読書が好きだと回答した児童も、全国・全道の割合を下回った。
○朝食を毎日食べていると回答した児童の割合は、全国・全道の割合を下回った。朝食を毎日食べていることと国語の平均正答率には、相関関係が見られるため、望ましい生活習慣の確立に向けて、家庭と学校が連携する必要がある。
○昨年同様、家の人と学校での出来事について話す児童の割合は、全国・全道の割合を下回った。家の人との会話と国語の平均正答率には、相関関係が見られるため、会話の場を「自分の言葉で、自分の考えを表現できる場」として捉え、引き続き、保護者へ子どもとの関わりを意識するよう働きかける必要がある。

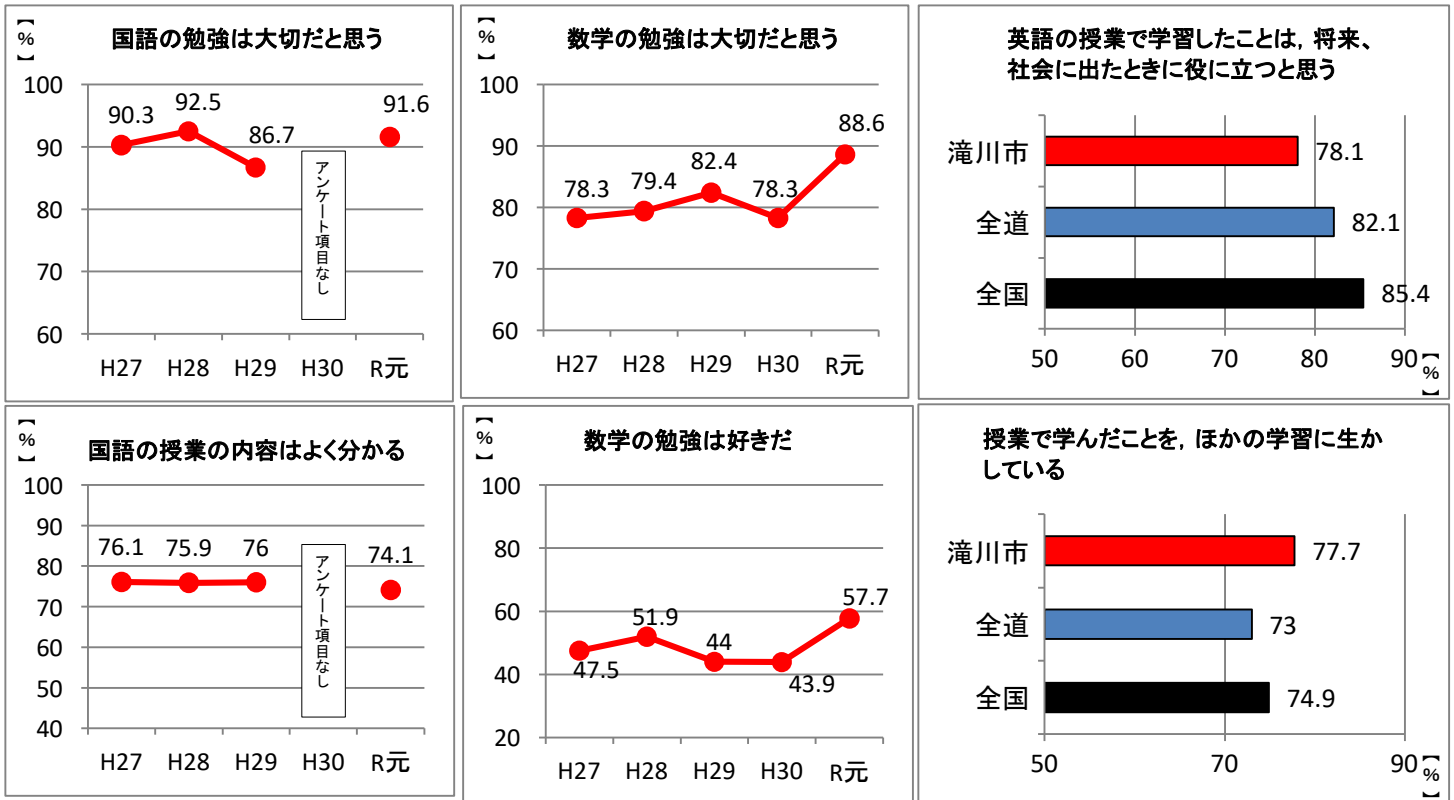
6 滝川市立中学校の学力の状況及び学力向上策（学校数：4校、生徒数：275名）

【教科全体の状況】

教科の領域別に全国を100とした場合の全道及び滝川市の状況をレーダーチャートで表したものを（滝川市の平均正答率÷全国平均正答率×100で算出）



【生徒質問紙調査】



【分析】

教科	国語及び数学、英語の平均正答率は、全国・全道の平均正答率をすべて下回った。特に、数学は、大きく下回った。領域別にみると、国語ではすべての領域において全国・全道の平均正答率を下回り、数学でもすべての領域において全国・全道の平均正答率を下回った。また、英語では、「聞くこと」が、高い割合を示しているが、他の領域と同様に全国・全道の平均正答率を下回った。特に、数学の「数と式」「関数」「資料の活用」、英語の「読むこと」は全国・全道平均正答率を大きく下回っており、苦手としている傾向が見られた。	学校は、児童の姿や地域の現状等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立させた。また、児童の学習状況や課題を全教職員で共有し、組織的に授業改善に取り組んできた他、個に応じた指導にも力を入れてきた。今後は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進する中で、課題となっている領域の力を高めることが求められる。
生徒質問紙	国語と数学は、ともに大切な勉強だと回答した割合は、前年よりもそれぞれ4.9%、10.3%の伸びが見られた。特に、数学においては、好きだと回答した割合も高いことから、今後の学力の伸びが期待できる。国語においては、授業内容がわかると回答した割合は横ばいの状況が続いており、授業において、充足感や達成感を味わわせる必要がある。また、英語においては、将来社会に出たときに役に立つと思うと回答した割合が、全国・全道の割合よりも低いことから、有用性を感じさせられるような授業展開が求められる。	
学校質問紙	「前年度までに、学習規律の維持を徹底した」「前年度までに家庭学習の取組として、学校では生徒に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにした」「前年度までに、漢字・語句など基礎的・基本的な事項を定着させる授業を行った」と回答した学校が多い。	

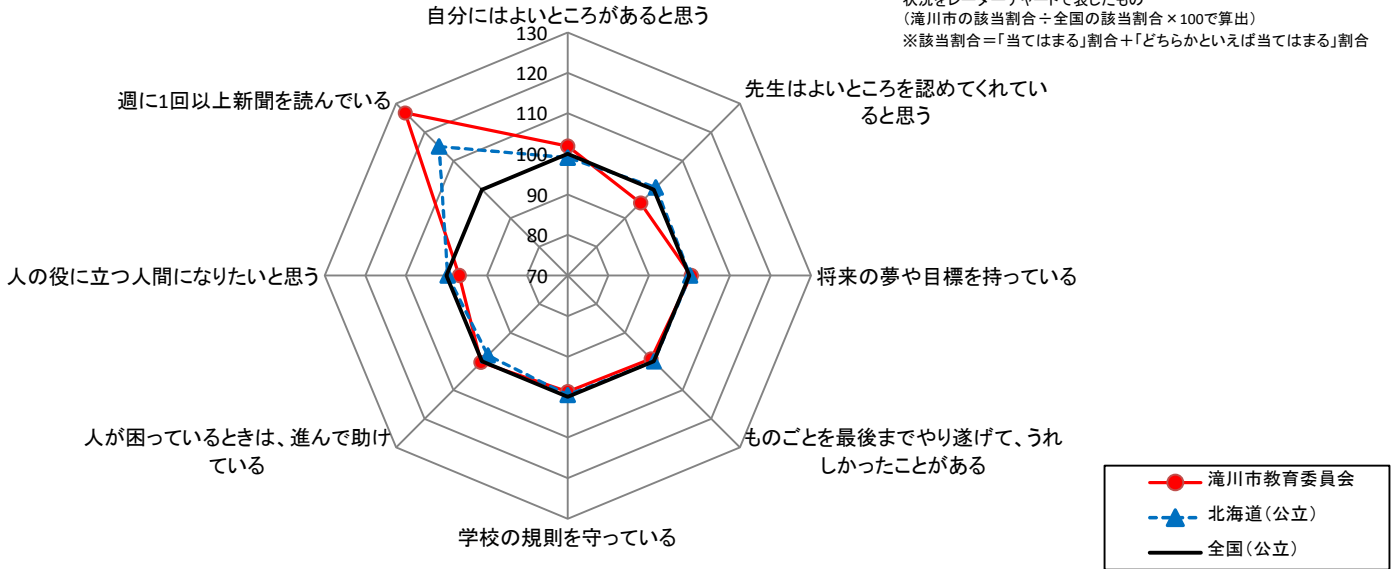
【滝川市の学力向上策】

- 個に応じた学びの支援のため、退職教員等外部人材活用事業や「学びサポーター」の活用など少人数指導体制を積極的に推進している
- 学力の二極化を解消するため、チーム・ティーチング指導や習熟度別指導を取り入れ、基礎・基本を確実に習得させ、知識・技能の定着を図っている。
- 各学校において家庭学習の手引を作成・活用し、望ましい家庭学習の定着に向けた取組を各家庭と連携して推進している。校区小学校と連携して作成した手引を用いている学校もある。
- 放課後や長期休業中の学習機会を拡充し、補充的・発展的な学習への取組を推進している。
- 小学校における授業改善推進チーム活用事業の取組を参考にした積極的な授業改善を推進している。
- ◎主体的・対話的で深い学びに関する教職員研修会を実施する。

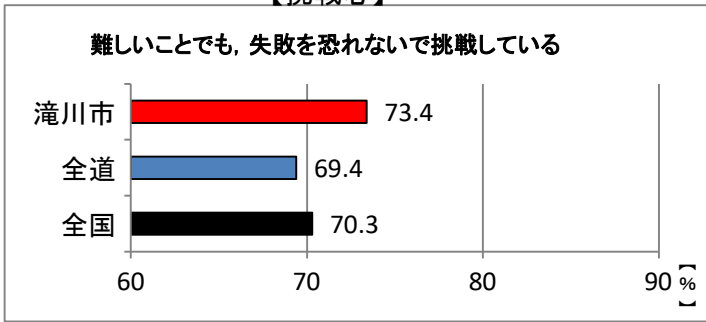
7 滝川市立中学校の学習状況及び改善策(学校数:4校、生徒数:275名)

【自尊感情及び規範意識等全体の状況】

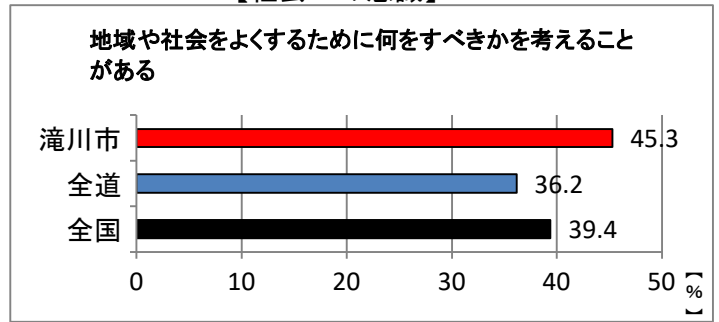
各生徒質問紙項目別に全国を100とした場合の全道及び滝川市の状況をレーダーチャートで表したもの
 (滝川市の該当割合÷全国の該当割合×100で算出)
 ※該当割合=「当てはまる」割合+「どちらかといえば当てはまる」割合



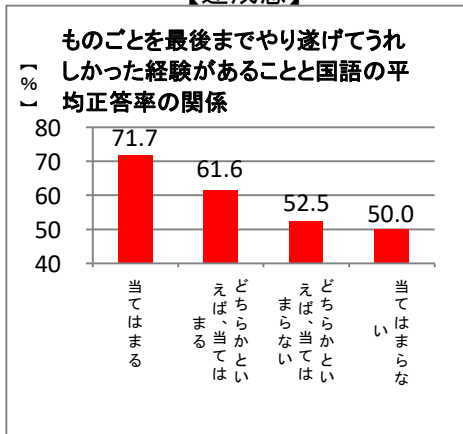
【挑戦心】



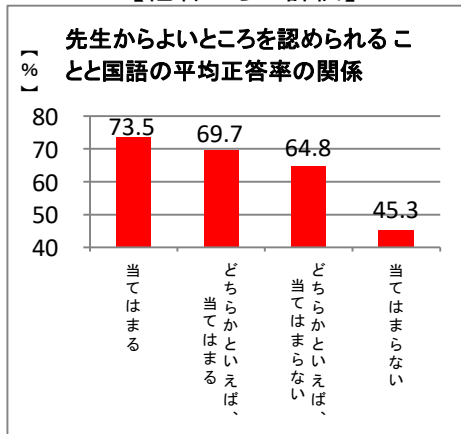
【社会への意識】



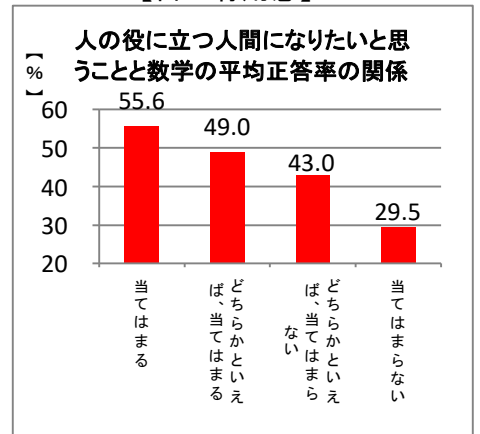
【達成感】



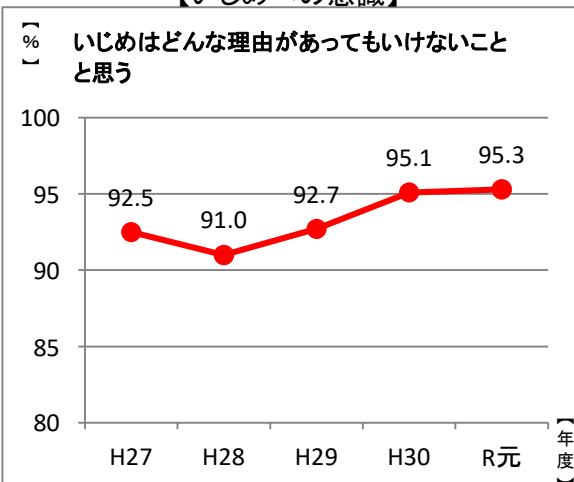
【他者からの評価】



【自己有用感】



【いじめへの意識】



【分析】

○「週1回以上新聞を読んでいる」と回答した割合は、全国・全道の割合を大きく上回った。また、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがある」と回答した割合も、全国・全道の割合を上回った。これまで、社会への意識を高める方策が講じられたためと考える。
 ○「自分にはよいところがあると思う」と回答した割合は、全国・全道の割合を上回った。この1年、生徒との積極的な関わりに努めた成果と考える。しかし、「先生はよいところを認めてくれていると思う」と回答した割合は、全国・全道の割合を下回った。よいところを認めてくれていると思うことと国語の平均正答率には、相関関係が見られるため、引き続き、生徒に自分自身を価値ある存在と感じられるような指導に努める必要がある。
 ○「人の役に立つ人間になりたいと思う」と回答した割合は、全国・全道を下回った。人の役に立つ人間になりたいと思うことと数学の平均正答率には、相関関係が見られるため、人の役に立つ、人から感謝された、人から認められたといった他者からの肯定的な評価やまなざしを感じさせる場面を、教育活動全体を通じて設定していく必要がある。

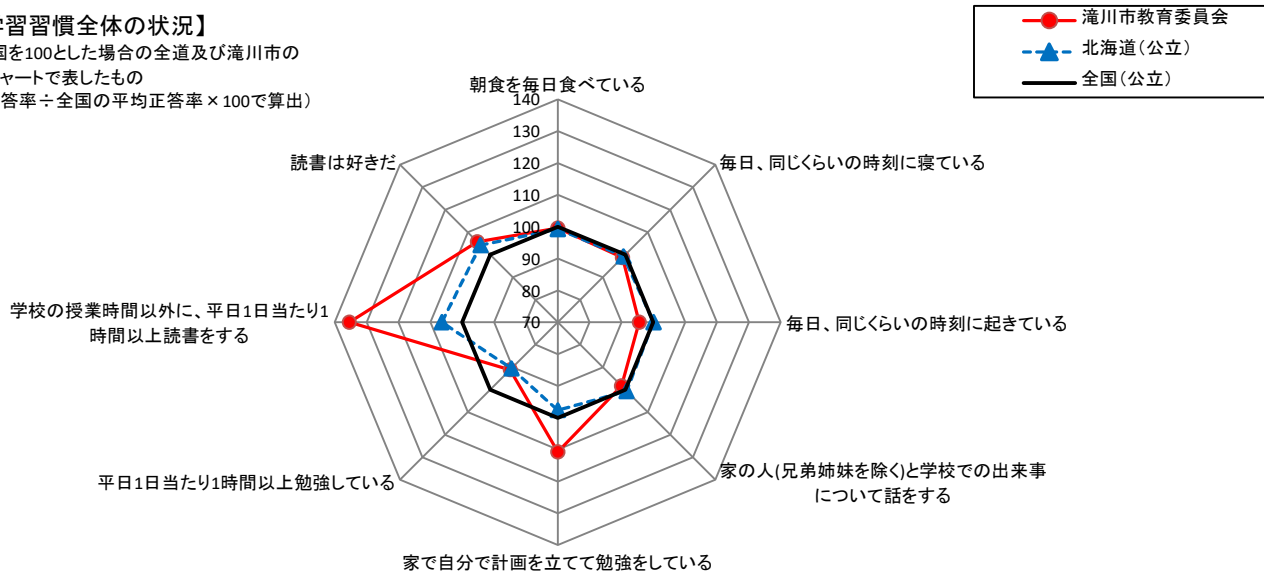
【滝川市の改善策】

◎「いじめはどんな理由があってもいけないことと思う」と回答した割合が、3年連続で伸びており、それは、全国・全道の割合よりも高くなっている。滝川市は100%となるよう目標を掲げて施策を推進しており、今後も生徒・家庭への一層の啓発と小中9年間を通じた子どもの心の成長を意識した主体的な活動が行われるよう支援する。
 ◎「難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦している」と回答した生徒の割合は、全国・全道の割合を上回った。一方で、「ものごとを最後までやり遂げてうれしかった経験がある」と回答した生徒の割合は、全国・全道の割合を下回っていた。この2点のことから、学校生活において、成功や失敗を繰り返しながら、ものごとを最後までやり遂げたときのうれしさや大切さを体感できるよう支援する。

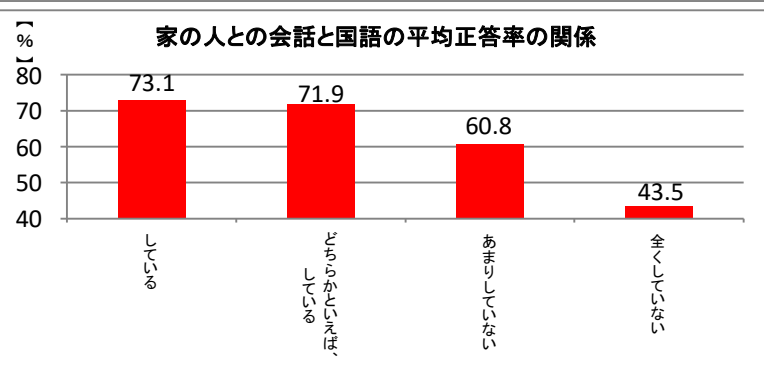
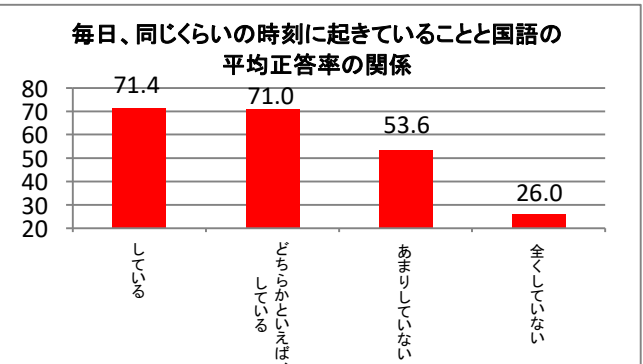
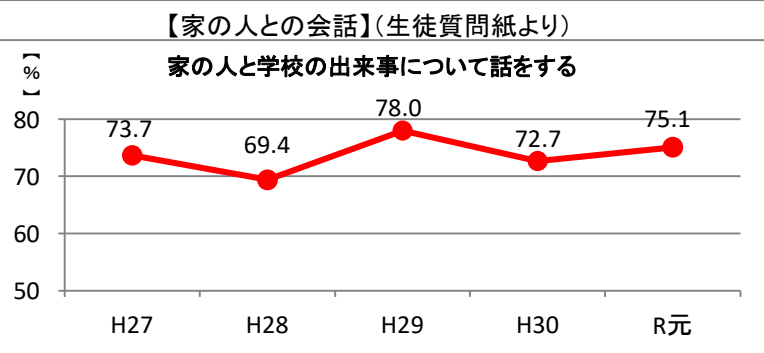
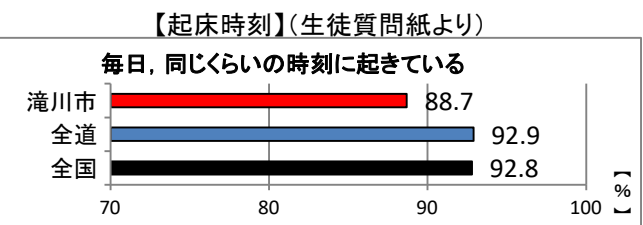
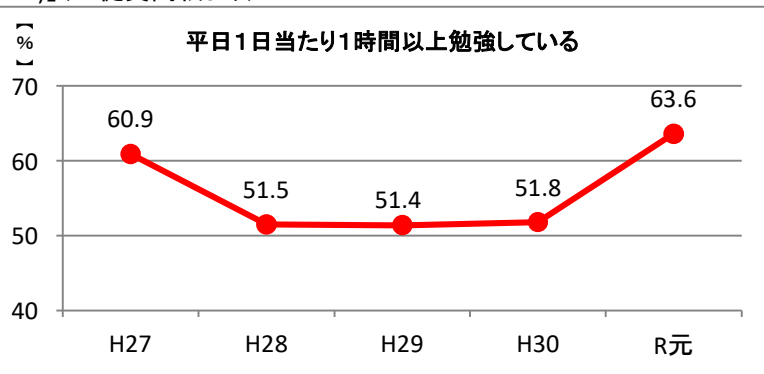
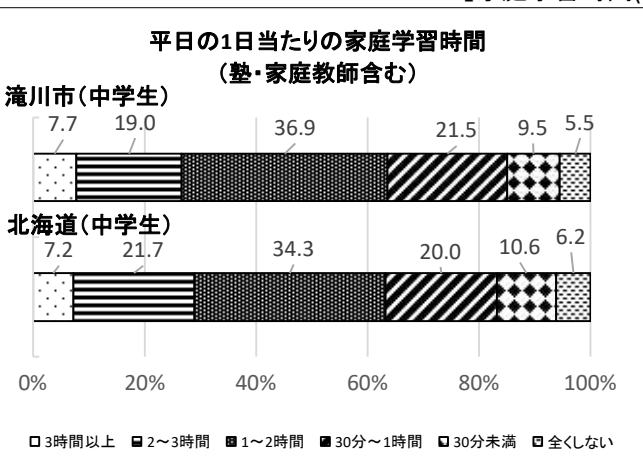
8 滝川市立中学校の学習状況及び改善策(学校数:4校、生徒数:275名)

【家庭生活・学習習慣全体の状況】

質問事項別に全国を100とした場合の全道及び滝川市の状況をレーダーチャートで表したもの
(滝川市の平均正答率÷全国の平均正答率×100で算出)



【家庭学習時間(平日)】(生徒質問紙より)



【分析及び改善策】

○学校の授業時間以外に、平日1日当たり1時間以上読書をする回答した生徒の割合は、全国・全道の割合を大きく上回った。さらに、読書が好きだと回答した生徒の割合も、全国・全道の割合を上回っていた。計画的な読書活動が行えるよう、生徒への適切な読書指導及び家庭への働きかけがあったためと考える。

○平日1日当たり1時間以上勉強していると回答した児童の割合は、依然として全国の割合を下回ってはいるものの、今回、全道の割合を上回り、学習時間にも伸びが見られた。また、自分で計画を立てて勉強していると回答した生徒の割合は、全国・全道の割合を上回った。これまで、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図ったり、家庭学習の取組として、学校では生徒に家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えるようにしたりした成果だと考える。

○毎日、同じくらいの時刻に起きていると回答した生徒の割合は、全国・全道の割合を下回った。毎日、同じくらいの時刻に起きていることと国語の平均正答率には、相関関係が見られるため、望ましい生活習慣の確立に向けて、家庭と学校が連携する必要がある。

○昨年同様、家の人と学校での出来事について話す生徒の割合は、全国・全道の割合を下回った。家の人との会話と国語の平均正答率には、相関関係が見られるため、会話の場を「自分の言葉で、自分の考えを表現できる場」として捉え、引き続き、保護者へ子どもとの関わりを意識するよう働きかける必要がある。